

ユリカモメの体サイズにおける地理的変異

○有馬浩史（京大医）・須川恒（龍谷大学）

今日の生物における地理的変異の研究では、種形成に作用する要因や、種の本質、および種の環境に対する適応的背景を理解していこうとする観点からの探求が求められ始めている。このことにより、かつて種・亜種の分類を行うことを主目的とする観点から地理的変異に関する理解が形成された生物種の一部では、地理的変異に関する理解そのものを再検討する必要性が生じてくる。本研究は、単型種とされているユリカモメ (*Larus ridibundus*) を対象として、標本の外部形態計測値を用いた統計数学分析を行い、本種の体サイズにおける地理的変異の詳細を明らかにするとともに、本種において地理的変異が生じる背景を本種の繁殖分布および渡り生態に着目した観点から考察していこうとするものである。

ユリカモメはヨーロッパから極東にかけて、ユーラシア大陸に幅広く繁殖分布するカモメ科の鳥である。本種の帯状の繁殖分布範囲のうち、ロシア西部、ロシア東部およびカムチャッカ半島の3地域において繁殖期に採集された成鳥の仮剥製標本を対象として外部形態の計測を行い、各個体群間における体サイズの変異に関して二元配置分散分析および判別分析の手法を用いて分析を行った。

分析の結果、ロシア西部の個体群とロシア東部の個体群の外部形態の間には有意な差は検出されなかったが、カムチャッカ半島の個体群の外部形態はロシア西部およびロシア東部のどちらの個体群よりも有意に大きいという結果が得られた (図)。

本種には強い帰巢性 (Philopatry) が認められることおよびカムチャッカ半島における本種の繁殖分布地が相対的地理的隔離された状態にあることを考慮すると、カムチャッカ半島で繁殖する個体群の体サイズにおける特異性は本個体群の相対的な遺伝的隔離を反映するものである可能性が高いと考えられる。カムチャッカ半島で繁殖する個体群のみが有意な体サイズ変異を有するという本個体群の特異性から考察すると、カムチャッカ半島の繁殖地における何らかの特殊な要因 (例えば地形的要因) が本種の帰巢性を強化する方向へ作用している可能性が考えられる。

発表ではさらに、経度に沿って体サイズが増高する現象 (west-east increase in size) や、カムチャッカ半島で繁殖する個体群と日本で越冬する個体群の高い関連性に関しても言及し、本種の地理的変異に関する議論を深めたいと思う。

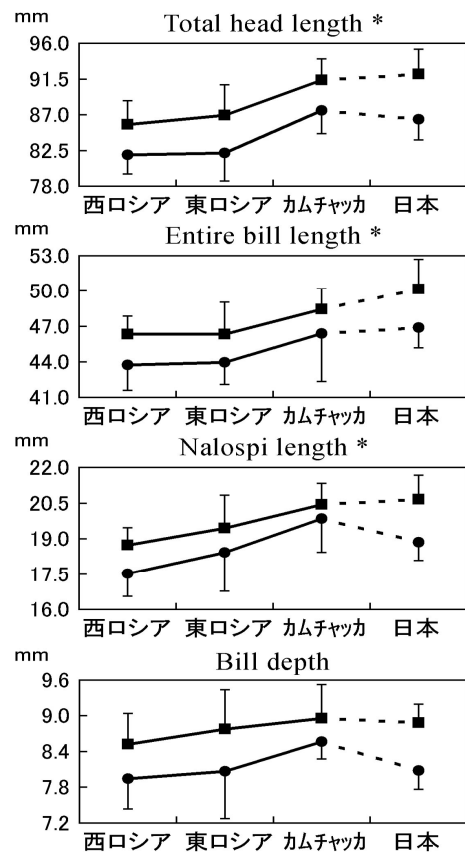


図. ユリカモメ各個体群の体サイズ計測値